



# ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第 9 号

発行日 2017年5月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

## 運動靴

光が明るく降りそそぐ空の下

ぼくたちは大きな沼のほとりにいた

号音が合図を送る

と ぼくたちは光の道を駆けだした

先頭を走っていたぼくの傍らを

ときめく靴たちが 馬のように追いこしていく

が 老いた主あるじの足裏の気魄は

ぼくに伝わってくる

疲れの翳をふむ復路は 向かい風

沼風が 陽光が 草の葉つぼが…… ながれる

主の強くかたい意志に運ばれる ぼく

長い帯の端つこで走るぼくは

疲れきった主を奮いたたせると

風いだ水面の向こうから 歓声がきこえてきた

水恋 (SUIREN)

庭の片隅の妻と出逢った池 わたしたちは  
それを水恋の池 と呼んでいた

妻の一周忌が終わり わたしはあの池に行  
つてみた どうしても行けなかった場所  
妻を呼び起こす池のほとりに

アルミ色の昼下がり  
大きな榎きぬぎの木がある境内を抜け  
杉木立の木陰の径を行く  
まろやかな風によつて  
遠くから  
こどもたちの声が聞こえてくる

庭園へとつづく散策路の  
飛び石づたいに

池に出る  
見慣れた太鼓橋が  
昏い心に微光をともし

黄泉よもつの坂とも思える赤い橋を渡り  
庭の片隅にある

楕円の池のほとりで  
しずかに眼をつむる

と  
眼裏まなうらに妻との記憶が  
ひそかに浮かびあがる

よみがえる記憶の風が吹いて  
押し寄せる孤独が  
胸をかけのぼる  
この池のほとりに  
いてほしい妻は  
いない

ひとりだけにしか射さない光は  
つめたい

池の水際に下り立ち

光を映しつづける鏡に

こみあげてくる悲しみを落とす

と

ヒツジグサが

パレットさながらに

色とりどりの花を咲かせて

わたしに呼びかける

ゆかしいヒツジグサ

そだけが明るくかがやいている

妻を思わせる純真さに

わたしはじつと見とれた

夫婦の縁を結び生きてきた

ひとりの空虚な生活

なんて考えたこともなかった

わたしにはわかる

妻の やわらかい一言が  
わたしを優しくさせた  
と

来世もまた

水恋の池で……

## 辞書女

あなたはわたしを負かしたいようだが  
わたしはあなたの問いにすべて答えられる  
あなたは  
わたしが知っていることばかり訊くからだ

夜  
女は読書を趣味とする未婚の教師

彼女のなごやかな眼は  
犀利な見極める眼に――

あなたは羨んでいるようだが  
嫉妬してはいけない  
諦めず言葉を追いつづけることだ

彼女の図書館には

謎の言葉を調べる辞書が並んでいる

彼女は寡黙だが  
明晰なするどい考察をする評論家  
いつになく真剣に辞書を引いている  
黒くきらめく獲物を狙う眼  
になっている

言葉も  
過去から未来へ

変遷する

あなたは言葉とつながり  
じぶんの言葉を生みだすのだ

彼女は言葉の顔をのぞきこみ

玩具のように分解する

愛 あい ai アイ

彼女は

ガウデイ\*のように未知を組み立てる

\*スペイン、カタルニアの建築家。神聖家族聖堂  
を残した。

ヤツ

ヤツは

心をこじあけて

耐えられない苦痛を

呼びもどす

鋭い爪で

たましいを傷つけ

麻痺させる

覚醒したいたみの底へ

追いつめられる

たましい

逃げろ！

ここよりも

とおくへ

車に飛び乗り

背骨をまつすぐののばす

四肢がしびれている

が、心の軸は

かたむきなながらも

均衡を保っている

わたしは

背骨をまつすぐに立てれば

生きかえる

逃げろ！

ここよりも

たかいところへ

ただひとりの 敵

わたしのなかで生きつづけるヤツ

不条理な記憶

のために

わたしは山に登りつづける

出口の見えない森のなか  
うっそうと茂った草木のすき間に  
ぽっかりとあいた穴  
光と交感する  
窓くぐり\*

神の領域に入る  
と

まっ黒な記憶のかたまりと  
まだ

向かいあうことができない  
わたしの石の顔に  
ふいに  
ふかい光があらわれた

\*山中でみられ、別世界の入口ともいわれている。



緑

家は長い間  
空き家だった

六月

仲のよかつた同級生が  
四十七年ぶりに  
都会から村に移り住んだ

彼が田舎を後にしたのは十八歳のとき  
はじめは  
年に数回は帰郷していたが  
夢中で働くうちに  
いつしか  
帰ってくることもなくなった

彼の家とは隣あわせ  
子どもころは  
日が山の端で暮れるまで遊んだ  
彼の両親はずでに亡くなり

一年前

彼から手紙をもらった  
奥さんが重いアトピー性皮膚炎で  
転地療養が必要なこと

走る四角い箱になだれ込む日常  
入りくんだ路地裏の臭い  
巨大な石造物に隠された夕やけ  
都会の生活は味気ない  
緑あふれる村が恋しい――

草むしりするわたしに  
いけ垣越しに聞こえてくる

夫婦の会話

(緑は、心にいいわ)

奥さんの声は  
こころが夕やけ色にともったよう

木綿のような生活が

二人をみずみずしくする

ある日

夫婦をさそつて里山へ出かけた

眼下には 黄金色の田んぼ

遠くには まばらな家々

視界のひらけたのどかな風景

彼は無言で

妻のしとやかな肩に手をおいた

そして

二人は洗いたてのような空を眺めた

のんびりとした村の生活

裏の畑の丹精こめた菊の香り

しずかに暮れゆくあかね色の夕ぐれ

近所づきあいの わずらわしさも

ゆるやかにながれる時間に吸収されて

うすれて

ちぎれ

消える

澄んだ陽や空気や風が

古生代<sup>\*</sup>の緑のように

村の景色をたかくしている

\*古生代の石炭紀（三億二千万年前のころ）に  
裸子植物が出現した。



徒然のエチュード VII

1

ピアノリストは

感覚的に指が動く

詐欺師は

直感的に口が働く

2

あなたの背中に

詩を書く

いつまでも

ふたりの愛が

消えないように

3

わたしはサイフ

ダンナが稼いだお金で

ふくらむわ！

4

ナス ウリ スイカ キュウリ メロン

のおっぱいがあふれている

田舎の温泉

とっさに

自分の胸を見つめてしまった

5

Hな詩ね！

詩という鏡に映った

あなたの姿よ

6

わたしから

脂肪を奪わないでください

やっとな

服にあう

体を手に入れたのですから

7

わたしは  
吝しわん坊で  
皺しわん坊

8

一日目 運動  
食欲＋ 体重－

二日目 運動  
食欲＋ 体重＋

三日目 運動  
食欲＋ 昼寝＋ 体重＋

なんのための運動？

### 【あとがき】

詩を学ぶうちに、もっと知りたい！ 学びたい！ の気持ちが高じて、みずから勉強会を開くことにした。



\*

去る四月十一日、あきた文学資料館において、

「第一回ピッタの会」を開催した。講師は前田勉氏  
にお願いをした。講話は「詩と詩人たち」。参加  
者は八名であった。

プロジェクトを使っての本格的な講話で、次  
の六つに分けて順に進められた。

### 1. 詩との出会い

中学校三年時に宿題で出された詩の暗誦と感想  
文が、詩に近づくきっかけとなったこと。また、  
「鹿」（村野四郎作）から感じ得たものが、その後  
の詩作における視点・方法論となって、大きな位  
置を占めていることなどが熱く語られた。

### 2. 日本の詩の前期

『新体詩抄』『若菜集』が出版される。大正半ば、

萩原朔太郎が口語体で詩作。昭和初期、思想や社  
会性を組み入れた詩が発表された。

### 3. 「戦後詩」という位置づけ

戦中、詩の思想的な基盤の弱さが露呈。終戦後、  
『荒地』が創刊され、「現代詩」の出発点となった。  
その後、黄金期を迎える。やがて、読者離れが起  
き、若手詩人は活動が沈滞、趣味や感性を披露す  
るだけの詩人に。現在は、詩集デビューする新し  
い書き手が出てきた。

また小川英晴は、優れた批評家の不在、書き手  
が熟年層と若年層の二極化になっていること、詩  
の根本の思想が脆弱であることなどを指摘した。

### 4. 全国の詩を書く人たちとの「距離」

かつて一緒に『詩芸術』に投稿した秋亜綺羅、  
日原正彦、小川英晴、池井昌樹等は、現在第一線  
で活躍している。

## 5. 秋田の詩を書く人たち

一九六一年～一九九七年に県内で出版された詩集や詩誌を映像で紹介。

## 6. その他

現在は、ツイッターやブログでの発表に加えて、音楽や朗読、舞踊、絵などを総合的に発表する人が出てきている。

また詩人の言葉として、

詩は感想や印象を述べたり、演説をしたりするためにあるのではない。(入沢康夫)

何のために詩誌を出すのか、詩誌の中に詩人不在、詩も不在。(中原道夫)

詩壇の二極分解がはっきりしてきた。生活綴り方ふう行分け散文と、難解奇天烈なものに。(郷原宏)

をあげた。

\*

ご参加の皆さんから、「期待どおりだった!」との感想もいただいております。求めれば与えられる、この年でも学べることのしあわせに、「ピッタの会」を開いてよかったなど、しみじみ感じています。

ほんとうにありがとうございました。

\*

今回は「ピッタインダウン」をお送りしている秋田市内にお住まいの方に、おもに案内をさしあげました。

次回は未定です。

